

k o k y o s o t s u s h i n 2 0 2 0

高教組通信 No.2

2020年12月4日
兵庫高教組書記局

URL : <http://www.hyogo-kokyoso.com> E-mail : honbu@hyogo-kokyoso.com

再び 日本学術会議会員任命拒否問題を考える

説明しないことは民主主義の否定=国民への暴力

菅義偉首相が、日本学術会議から推薦された6人の会員の任命を拒否してから2ヶ月が経過しました。この間、国会でこの理由を野党から質問された首相は、「総合的・俯瞰的観点」「多様性確保」など、学術会議のあり方については答弁しましたが(事実には反するものでしたが)、肝心の6人の任命拒否の理由をいまだに説明していません。これは、「任命拒否」という権力行使の理由を主権者である国民に説明しないという、民主主義の基本の否定であり、国民に対する一種の暴力で、許されません。学術会議のあり方に論点をすり替えてはならないのです。

「学問の自由」を侵害する任命拒否

すでに、任命拒否された学者のゼミ受講生が、就活で不利益を被らないかと心配していると報道されています。また、任命拒否された学者自身、唯一の推薦理由である「優れた研究または業績」を時の権力によって否定される、名誉毀損とも言える被害を受けたわけです。さらに、こんなことになるのなら研究対象や内容の変更をしようとか、社会的発言は控えておこうとか考えさせられたりする学者が出てきても不思議ではありません。こうして、萎縮や政権への忖度が強いられ、「学問の自由」が失われていきます。

権力が学問を支配すると国民が不利益を被る

科学的な真理は多数決になじまない永遠なものです。その権力が自分たちの都合で学問を支配し、自由な研究や科学的真理に基づく権力批判を許さないと、国民に不利益が生じます。

たとえば、太平洋戦争中の米軍の焼夷弾への政府の対応です。焼夷弾は石油化学兵器ですから、むしろをかぶせたり水をかけたりして消火できるものではありません。避難するのが一番です。しかし、そういう科学的真理は伏せられ、爆撃を受けた住民は、政府の命令で避難を許されず、実効性のない消火活動に従事させられ、落とさなくてもよい命を落としたのです。

現在の新型コロナウイルス対策にしてもそうです。政府の任命した専門家会議だけに任せる

のではなく、その他の科学者たちにも自由にあらゆる角度から研究してもらい、安全なワクチンや薬の開発、仮に政府の意に沿わないものであったとしても研究成果に基づく感染防止策の提言などをしてもらわなければ、国民の命は救えません。どんな場合でも、時の権力の都合によって学問が左右されてはならないのです。

政府による権力乱用=人権侵害 をストップしよう

「学術会議の推薦に基づいて首相が(形式的に)任命する」と規定している学術会議法を無視した任命拒否を国民が看過してしまうと、今後どのような事態をまねくでしょうか。それは、選挙に勝った権力者が、憲法や法律がどうであれ、それを無視して何でもできる社会になってしまうということです。権力者も憲法や法律に従うというのが立憲主義・法治主義の考えですが、それが根底から覆り、権力の乱用=人権侵害が始まります。

教育に携わる私たち教職員にとっても、真理に基づいた教育が行えるかどうかの瀬戸際ではないでしょうか。「学問の自由」が侵害されるのに、真理に基づく「教育の自由」が尊重されるはずがありません。真理に基づかない非科学的な教育を強制された時代があったことを忘れてはならないのです。

自由に物が言える社会を維持できるか、統制されるかの分水嶺

12月2日、人文系の310の学協会が、今回の問題で日本外国特派員協会で記者会見し、菅首相に理由の説明や任命を求める英文の共同声明を発表しました。そして、今が「自由に物を言える社会を維持できるか、統制されるかの分水嶺だ」と訴えています。これほど多くの学協会がこのように行動するのは、民主主義が根本から破壊されて後戻りできない社会になりかねないという深刻な危機感を、多数の学者が感じているからです。ただ、国民世論があまり高まっていないのをいいことに、政権は、国会も閉じて逃げ切りをはかろうとしています。しかし、11月30日、大学生や高校生の有志も、官邸前で任命拒否に対する抗議活動を始めました。マルティン・ニーメラーの言葉をかみしめるときかもしれません。

ナチスに抵抗し、強制収容所に収容された牧師マルティン・ニーメラーの言葉

ナチスが最初、共産主義者を攻撃したとき、私は声を上げなかった。

なぜなら私は共産主義者ではなかったから。

社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声を上げなかった。

なぜなら私は社会民主主義者ではなかったから。

彼らが労働組合員を攻撃したとき、私は声を上げなかった。

なぜなら私は労働組合員ではなかったから。

ユダヤ人が連れ去られたとき、私は声を上げなかった。

なぜなら私はユダヤ人ではなかったから。

そして彼らが私を攻撃したとき、私のために声を上げてくれる者は 誰一人残っていなかった。